

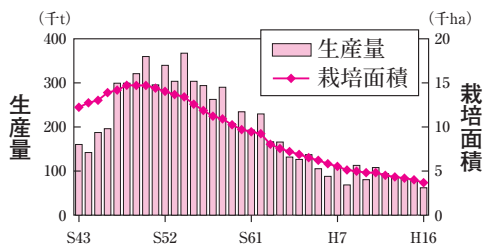
佐賀県における温州ミカン栽培についてー

ー一年を通しておいしい佐賀ミカンをお届けするためにー

佐賀県果樹試験場

佐賀県のミカン産業の動き

佐賀県の2004年産温州ミカンの栽培面積は、3,450ha（全国5位）、生産量62,000t（全国6位）であり、佐賀県果樹農業の基幹作物としても大きく位置づけられている。佐賀県の温州ミカンの歴史は300年以上と古いが、経済作物として本格的に栽培が始められたのは戦後の昭和20年代以降で、とくに高度経済成長期を迎えた昭和30年代から40年代に飛躍的な発展をとげた。しかし、史上空前の大豊作となった昭和47年以降は、全国的な恒常的生産過剰により価格は暴落し、現在も依然として価格の低迷が続いている。さらに、国民の果実消費量の減少に加えて消費者ニーズの多様化は、消費者の「安全・安心で高品質な果実」への志向を一層強め、そのため産地間の競争がますます激化している。しかし産地の現状は、価格の低迷や生産者の高齢化、それに伴う放棄園の増加による生産性の低下等、厳しい経営状況が続いており、佐賀県のミカン産業においても大きな転換期を迎えている。



第1図 温州ミカンの栽培面積および生産量の推移（佐賀県）

資料：H17果樹関係資料（佐賀県）

県内産地では、これまで温州ミカンのハウス栽培による早期化・高品質化や、露地栽培におけるマルチ栽培の導入等、一年を通して消費者におい

しい「佐賀ミカン」をお届けするための様々な取り組みが行われている。

日本一のハウスミカン



写真1 浜玉町のハウス栽培風景

佐賀県の2004年産ハウスミカンの栽培面積は、248ha、生産量11,900tで、全国の22%のシェアを占め、日本一である。

露地栽培の温州ミカンの価格低迷が続く中、生き残るための活路の一つとなったのが温州ミカンのハウス栽培である。1973年に伊万里市と唐津市浜玉町の3戸の農家で栽培が始まり、出足こそ鈍かったが、露地ミカンに比べて品質、収量とも優れていることもあり、高値で取り引きされたことから、栽培面積は年々増え、県別生産量では1986年以降、20年間日本一を維持する大産地となったのである。

(1) ハウスミカンとは

その昔、温州ミカンといえば12～1月に出回る冬の定番の果物であった。しかし、熟期の早い極早生品種の登場や貯蔵技術の進歩により出荷期間は拡大し、ハウスミカンの登場により、現在ではほぼ年中食べることができるようになったのであ

る。

露地栽培の温州ミカン は 4 月に発芽、5 月に開花するところから、その年のサイクルが始まる。ハウス栽培では、冬にハウス内を加温し、ハウスの中を春の気候にして開花、結実させ、温度や湿度、土壌水分等の環境を調節することで、春から夏そして秋の季節を人工的に作り出し、そのサイクルを前進させることで、夏に収穫することができる。高度な技術が要求されるが、気象に左右されることなく管理することができるので収量や品質を高く維持することができる。

ハウスミカンには温州ミカンの極早生、早生品種が用いられ、加温時期により早期加温、中期加温、後期加温そして小加温のグリーンハウス（加温栽培よりも設定温度を低くしてミカンの生育を 1～2 か月早め、着色をつけないで中身を完熟させる栽培方法）に大きく分類されており、4 月から 9 月にかけて出荷されている。7 月中旬から 8 月上旬にかけてはお盆や中元用としての需要も多く、今や夏には欠かせない果物の一つとなっている。

第 1 表 佐賀県産ミカンの出荷時期

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
品目												
ハウスミカン					早期	中期		後期				
グリーンハウス												
極早生ミカン												
早生ミカン												
普通ミカン												

（2）早期出荷や高品質化への取り組み

当初のハウスミカン栽培は、露地栽培の生育を若干早くしたタイプが主流であったが、連続した有利販売や農家の経営規模拡大のためにはより早期に加温し、より早期に出荷するための技術確立が必要となってきた。しかし、佐賀県の冬季の気象条件は、全国の主要産地に比べて恵まれないため、年によっては着花不足が原因で、その年の加温を中断したり、生育のバラツキにより、収益性を著しく低下させる場合があった。さらに、より高糖度な果実を生産するための水管理や品種の選定等様々な課題があった。そのため、生産者をは

じめ、農協や試験場等の農業関係機関が一体となって様々な課題に取り組み、佐賀県の気象や様々な園地条件に合った、温度管理や剪定方法、水管理、さらには早期加温に適した品種を見出すことができた。その結果、加温の前進化が可能となり、長期間にわたって果実を生産することができ、経営面積の拡大が容易となったのである。

（3）ハウスミカンの今後の課題

これまでの多くの努力により、温州ミカンを暑い夏の時期に消費者に届けるための技術はほぼ確立している。しかしながら、ハウス栽培においては施設の建設費に加え、冬季に加温しミカンを生育させるための燃料費等、生産費が莫大となるため、ハウスミカンは露地ミカンに比べて店頭での価格が高く、さらに流通する量も少ないことから、多くの消費者が手軽に購入できるものではないのが現状である。そのため、ハウスミカン栽培では生産にかかる経費を削減させることと、これまで以上に生産量を高いレベルで維持することが重要な課題となる。

佐賀ミカンの一層の銘柄確立に向けて

佐賀県の露地栽培の温州ミカンは、西南暖地の有利性を活かし、9 月下旬から出荷される極早生みかんを中心に早期出荷による有利販売を行ってきた。しかし、全国的な極早生産地の増加や消費者の品質志向の高まりに伴い、果実品質が気象に左右されやすい露地栽培の温州ミカンでは、早いだけで品質の低い果実は消費者に受け入れられなくなり、価格は低下している。栽培面積は、全国同様ピーク時の 3 分の 1 まで減少しており、今後は適地を絞りながら需給バランスを保った中で高品質果実の安定生産が重要となっている。

（1）マルチ栽培への取り組み

佐賀県では 1 個 1 個のミカンの糖度や酸度を選別できる光センサー式選果機が導入され、高い品質基準をクリアした果実をブランド商品、「さが美人」として出荷・販売する取り組みが進んでいる。そのため、産地では「さが美人」作りに向けて、

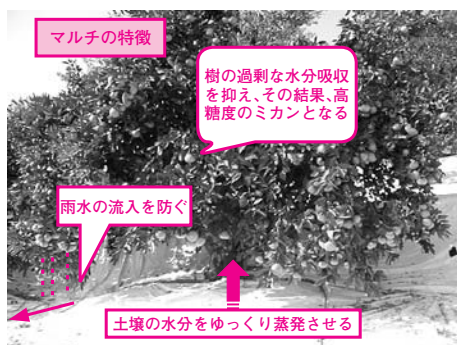


写真2 マルチ栽培で高糖度ミカン

マルチ栽培への取り組みが積極的に進んでいる。マルチ栽培とは、地表面を特殊なシートで被覆し、果実の生育期に雨の流入を防いでミカンの樹が過剰な水分を吸収できないようにし、高糖度果実の生産を可能にする栽培技術である。

西南暖地に位置する佐賀県は、夏秋期に降雨が多く果実品質が安定しない状況であったが、マルチ栽培を導入することで積極的な水分制御が可能となり、高品質果実の安定生産を図ることができるようになったのである。

(2) 早期被覆で「さが美人」作り

マルチの効果（増糖効果）は、気象条件や園地の状況、さらには樹の状態等、様々な状況により異なってくる。そのため、園地によってはマルチの被覆時期の遅れや、園外への排水対策がうまくいかず、高糖度果実の生産に失敗した事例も少なくない。また、土壌の乾燥が強くと、ミカンの樹の水分吸収が極端に少なくなると、糖度は高くなるが、酸味が高くなりすぎて味を損なってしまう、さらに果実の肥大も抑制され、収量や商品性が低下してしまう等の課題が生じた。そこで、産地ではこれまでの経験や試験研究で得られた結果から、糖度を高めることを最優先とした管理が重要であると捉え、「早期被覆」を合言葉に、土壌の早期乾燥に努めるとともに、被覆後も園地や果実品質を定期的にチェックし、それぞれの産地に合った栽培管理の徹底を図っている。マルチの被覆作業は、6～7月の暑い時期に行うため、重労働であり、マルチ資材の費用（10万円/10a）もかかる。だが、「1個のおいしくないミカンで産地全体の信用は

失われる」ことは、農家も十分理解しており、今後も消費者が求めるおいしい「さが美人」作りのための努力を惜しまない。

(3) 「佐賀ミカン」の今後の課題

「佐賀ミカン」の一層の銘柄確立を図るためには、産地の特性に応じた優良品種への更新や、高品質果実生産を前提とした省力化のための園地基盤の整備を進めることで産地強化を図るとともに、適切なマルチ栽培の実施等による「さが美人」の生産拡大に取り組む必要がある。そして、今後も生産者はもとより、消費者の視点を重視し、高品質果実の安定生産技術に加えて安全・安心のための環境保全型農業技術の開発・普及を進めて行く必要がある。そのため果樹試験場では、温州ミカンの最も新しい高品質果実生産技術である「根域制限高うねマルチ栽培」の普及に取り組んでいるほか、県内各産地の土地・気象条件と果実品質の関係を科学的に解析し、個々の農家が自分の園地の状況に応じて高品質果実が生産できる技術の開発にも取り組んでいる。



写真3 根域制限高うねマルチ栽培

以上のように、近年の温州ミカンを取り巻く状況は厳しいが、一年を通して消費者においしい「佐賀ミカン」を届けるため、農家をはじめ、産地や県内の農業関係機関が一体となって様々な取り組みを行ってきており、今後も佐賀県果樹農業の基幹作物である温州ミカンの振興を図っていくことは、農業・農村が持続して発展して行くうえでも極めて重要である。そのためには、農業者にとっても、また消費者にとっても、魅力のある農業としていくとともに、両者の信頼関係をさらに深めていくことが必要である